

茨城高等学校・中学校

校長室だより 2021年6月18日

沖縄を想う日

6月23日、それは沖縄にとって特別な意味を持つ日です。2021年6月23日、沖縄は76回目の慰霊の日を迎えます。

沖縄は、太平洋戦争において日本で唯一の地上戦が行われた地です。1945年3月末、太平洋戦争で最大規模の戦火が沖縄を襲いました。「鉄の暴風」と呼ばれた約90日におよんだ激戦は、沖縄の山容を変え、琉球王朝から続く文化遺産を破壊し、20万余の人命を奪い去りました。沖縄戦の特徴は、亡くなった方の半分以上が軍人ではない一般住民だったことです。住民の4人に1人が命を落としたとも言われています。

日本の敗戦が時間の問題となった太平洋戦争末期、沖縄守備隊司令官牛島中将の任務は、沖縄戦を長期化することでした。一日でも長く米軍を沖縄に足止めすることで本土上陸を遅らせ、その間に少しでも有利な降伏条件を連合軍と交渉する、という戦争終結にあたっての思惑が日本政府にあったからです。沖縄を犠牲に日本の利益を守ろうとしたこの作戦は、後に「捨て石作戦」とも呼ばれました。沖縄守備隊は、司令部のあった首里が陥落した後も、南部に撤退しながら抵抗を続けることとなります。

現在「沖縄慰霊の日」にさだめられている6月23日は、牛島司令官が沖縄本島南部の摩文仁（まぶに）の洞窟で自決し、日本軍守備隊の組織的戦闘が終わった日です。しかしながら、牛島司令官から出された最後の命令書には、武装解除や降伏をうながす内容は含まれていませんでした。各部隊、各個人がそれぞれに戦闘を継続することを命じ、「生きて虜囚（りょしゅう）の辱めを受くことなく、悠久（ゆうきゅう）の大義に生くべし」の一文でしめくられたその命令書が、結果として十数万におよぶ住民に犠牲を強いることとなります。米軍の掃討作戦は継続し、米軍が沖縄作戦終了を宣言したのは7月2日のことでした。

戦後、沖縄はアメリカの施政下に置かれ、1972年に本土復帰を果たします。本土復帰を果たして49年になる今日でも、日本の国土面積のわずか0.6%に過ぎない狭い沖縄県に、日本に存在する米軍基地の総面積の約75%の広さの基地が存在しています。米軍基地は沖縄県の面積の約11%を占め、名護市辺野古（へのこ）沿岸では新基地建設のための埋め立てが進行しています。

後にノーベル文学賞を受賞する大江健三郎氏は、その著書『沖縄ノート』（岩波新書）の中で、沖縄が日本に属するのではなく「日本は沖縄に属する」と繰り返し述べています。沖縄に負担を強い、依存することによって日本の繁栄がもたらされているという意味において、この言葉は、『沖縄ノート』が書かれた1970年当時、日米安保のもと沖縄がべ

トナム戦争の米軍爆撃機の発進基地となっていた事実のみならず、沖縄を「捨て石」として本土の延命をはかった太平洋戦争末期の状況にも、普天間（ふてんま）をはじめとする数多くの米軍基地が沖縄に集中することで日米同盟関係を維持している現在の日本の状況にもあてはまるのではないかと思います。

以前、茨城高校が沖縄研修旅行を実施していた頃、何度か生徒を引率して沖縄を訪れる機会がありました。

沖縄南部の戦跡を訪れた一場面を鮮明に覚えています。年配の平和ガイドさんを囲むようにして、クラスの生徒たちが話に聞き入っています。秋とは思えない強い日差しが降り注ぎ、担任の自分は、生徒たちから少し離れた木陰に立っていました。生徒たちの背後には、亜熱帯の森の深い緑と紺碧の海が広がっています。名も知らない南国の鳥のさえずりが聞こえてくるだけの、しわぶき一つ無い静寂。楽園のような美しい景色の中で、平和ガイドさんの沖縄なまりの静かな口調で語られるのは、かつてこの場所で繰り返された、この世の地獄と形容したくなる沖縄戦の悲劇でした。「あなたたちは大人になったら、決して戦争を起こさない、戦争に反対する人になってください」説明の中、平和ガイドさんは何度も何度もそうおっしゃっていました。自分は、多くの人命が理不尽に奪われたまさにその場所に、今こうして生徒たちと何事もなく立っているという事実が、何とも言えず奇妙に思えてなりませんでした。

終戦から70数年を経た現代を生きる私たちの多くは、戦争の現実を知りません。遠く離れた地域で生活する人間にとって、沖縄戦や基地問題について、沖縄に住む人たちの思いを十分に理解することは困難でしょう。

しかし、戦火が沖縄を襲い、広島・長崎に原子爆弾が投下され、数え切れない人命が戦地や本土で失われ、数え切れない人々が深い悲しみを経験した時代がかつて存在し、地層のように積み重なるその時代の上に現在の平和が築かれているという事実を、私たちは忘れてはならないと思います。

平和はあたりまえにそこにあるものではない。歴史をひもとけば、人間の歴史は戦争の歴史といっても過言ではありません。むしろ戦争のない平和な時代が奇跡に近いのかもしれない。沖縄を想うとき、「決して戦争を起こさない、戦争に反対する人になってください」と生徒たちに語りかけた平和ガイドさんの言葉がよみがえります。平和は、今までも、これからも、私たちが強い意志で作りに上げていかなければならないものなのだと思います。

まもなく6月23日。今年も沖縄慰霊の日がやってきます。この文章が、生徒諸君にとって、戦争について平和について考える、小さなきっかけになってくれれば幸いです。

本質をつかむ力

日曜日の夜9時、ドラマ「ドラゴン桜」が放映されています。TBSテレビには何の恩も義理もないので、観なさいと勧めるつもりはありません。が、筆者は観ています。阿部寛が演じる“東大合格請負人”桜木健二弁護士が、独自の指導で低偏差値の生徒たちを東大に合格させていく、というエンターテインメント。「バカとブスこそ東大に行け！」と吠える桜木に「いやいや、今時さすがに、それはコンプラ的にアウトでしょ」などと心の中で突っ込みを入れながら観ているのが何とも楽しい。

少し前の回で、学校一番の秀才と低偏差値の東大志望の生徒たちが東大の過去問を使ったテストで勝負する、という話がありました。詳細は省きますが、論理的な思考をおろそかにし、問題の本質を見誤った秀才は敗北します。採点がおかしいと食い下がる秀才に、桜木は「東大が求めているのは本質をつかむ力だ！」と決めゼリフをとばすのです。

ドラマはフィクションですから、「ドラゴン桜」の勉強法で本当に東大に合格できるかはわかりません。しかし、東大だけではなく多くの大学が、知識偏重ではない論理的な思考力、「本質をつかむ力」を受験生に求める傾向が急速に高まっている、というのは紛れもない事実です。

数年前、高3の学年主任をしていたとき、本校の医学コースの前身である医歯薬外部連携講座から模擬面接の面接官役を依頼されたことがあります。ある医科大学の推薦入試最終選抜に2人の生徒が残り、その試験が集団面接の形式で行われるので、医学部や医療系学部を志望する生徒を他に3～4人加えて模擬集団面接を行うとのことでした。模擬面接は、受験生全員が同じ資料を読み、その後で意見発表や質疑応答を行うという形式で行われました。

そのとき受験生に渡された過去問は「代理母出産」に関する資料でした。代理母出産とは不妊治療の一つで、体外受精などによって得られた受精卵を、母親ではない別の女性の子宮に入れて代わりに出産をしてもらおうというものです。女性の子宮に問題があり出産できない夫婦にとって、遺伝的なつながりのある子どもを授かるための方法は代理母出産しかありません。

さらにその資料には、アメリカや西欧諸国の不妊夫婦の多くがインドで代理母出産を行っており、インドでは代理母出産専用の施設が設けられている状況などが、表やグラフ、文章で示されていました。

決められた時間内で資料に目を通し意見発表となったわけですが、驚いたことに、模擬面接に参加した生徒全員が、代理母出産にほぼ無条件で賛成の立場をとりました。「代理母出産は不妊に悩む夫婦にとって希望の光となる」「不妊の夫婦が自分たちの遺伝子を受け継ぐ子どもを持てるようになることはとてもよい」とか「インドでは代理母出産専用の施設を設けているので、妊婦の健康管理や出産時のリスクを減らす上で効果的だ」という意見もありました。どの意見も間違っていないと思います。しかし「本質をつかむ」ことはできていたのでしょうか。

模擬面接が終了して、振り返りをおこなう中で、筆者は生徒たちに「インドには不妊に

悩む夫婦はいないのかな？」と問いかけてみました。生徒たちは「？」といった顔をしています。「インドの夫婦が、逆にアメリカで代理母出産を行わないのはなぜだろう？」「??」「アメリカの夫婦がわざわざインドで代理母出産を行うのはどうして？」すると、一人の生徒が「あ、お金・・・」と言いました。

もうわかりましたね。この代理母出産システムの背後には、アメリカをはじめとする先進国とインドとの間の経済格差が存在しています。アメリカは費用の安いインドへ代理母出産をアウトソーシングしており、インドの貧しい女性たちを利用した代理母出産がビジネスとして成立しているということです。代理母出産は、生徒たちの意見のように、不妊の夫婦にとっては福音となります。しかし、子どもを産むという女性としての根源的な行為が商品化されていることの是非、代理母たちが経済的理由から出産という生命にも関わるリスクをおかしていることの問題点を指摘した生徒は一人もいませんでした。

この模擬面接を受けた生徒たちの名誉のためにも言い添えますが、彼らは河合塾やベネッセの模擬試験では偏差値70オーバーの、学年でもトップクラスの学力を持った生徒たちです。少なくともうち4人は、国立大学の医学部に進学し、数年後には医師となっているはずですが。そんな彼らが代理母出産の問題点に気づけなかったのはなぜでしょうか。

本質をつかむ力、とは何か。それは、常識を疑う力だと筆者は思っています。「そんなのあたりまえ」「結局、〇〇は〇〇でしょ」という姿勢からはものごとの本質は見えてきません。大切なのは、既存の常識の前で立ち止まり、「ちょっと待てよ？」と自分の頭で考えてみることです。もちろん、すぐに答えが出るとばかりは限りません。研究の分野などでは、一つの仮説に対して何年も何十年もかけてブレイクスルーを実現した、などという例がたくさんあります。

それでは、本質をつかむ力を身につけるにはどうしたら良いのでしょうか。残念ながら、筆者は現在、その問いに対する明確な答えを持ち合わせていません。こうすれば誰にでも確実に論理性が育つ、といった便利な方法は、おそらく存在しないのではないかと思います。唯一、解答めいたことが言えるとすれば、「有意義な知的体験を通じて思考することを習慣化すべきだ」ということです。本を読むこと、新聞を読むこと、ニュースを観ること、識者の話に耳を傾けること、すべてが有意義な知的体験です。大切なのは、「知識キャッチャー」にとどまらないことです。読書やニュースから得られた知識や考え方を、一度自分の言葉でかみ砕き理解し直してみる。そして、それらを自分はどう受け止め、どう評価するのかをしっかりと考える習慣をつけることが「本質をつかむ」ための近道になるのだと思います。こうした経験を積み重ねて得られた知見は、借り物ではない本物の知識となります。

代理母出産の問題点に生徒たちが気づけなかったのは、単に経験が足りなかったからです。筆者の中には、長年、面接や小論文の指導を通じて蓄積された経験があり、経済格差や、先進国による途上国への搾取、性の商品化、生命倫理などといった思考の切り口が存在していました。経験の蓄積の少ない生徒たちには、それが備わっていなかった、ただそれだけのことです。

「本質をつかむ力」が必要とされるのは、大学入試だけではありません。むしろ大学入

試はほんの一例にすぎません。

急速なグローバル化、A Iに代表されるデジタル革命、ポストコロナの問題、今、世界はかつてない大きな変化の時代を迎えようとしています。これまでの常識や前提が通用しない時代です。君たちが先の見えない未来を生きていく中で、正解のない問題を前にしたとき、出口の見えない壁を乗り越えようとするとき、物事の本質を見極める力が不可欠となります。常識を疑うこと、常識にとらわれずに新たな価値を見いだしていくことが、今、君たちに求められています。